

高橋 宏 幸

本篇は、宮内庁書陵部に蔵する『大乘本生心地観経』（卷第八）一帖を、その院政期に加点された角筆および朱筆の訓点によって訓読したものである。

〈訓読文凡例〉

- 1 原本の内題を1行目として、以下尾題の417行目まで各行頭の漢字に▽（5行目ごと）に▼を冠し、その上に行数を記した。
- 2 原本の漢字はJISコード内の字体で記し、JISにない漢字は※にして末尾に補注として記した。
- 3 原本には朱筆と角筆で記された平仮名の字体による仮名点とヲコト点、朱筆による声点、句読点、返点とが加えてあるが、仮名点は片仮名で、ヲコト点による訓みは平仮名にし、角点は「」で括った。
- 4 仮名点とヲコト点とで訓みが重複した場合、ヲコト点の読みを「」で括った。
- 5 不読文字は「」で括った。
- 6 再読する文字の二度目の訓みは、《》で括った。
- 7 長文に涉って返読する漢字は、【】で括った。
- 8 私意による補読は平仮名を（ ）で括った。
・ 解読しやすいよう適宜和語には濁点を施し、会話文にカギカッコを付した。
- 9 原本の加点状態等で留意したものについては、当該漢字に*を付して補注とした。

角点は、小林芳規博士「書陵部蔵大乘本生心地観経卷第八院政期角点」（『奥村三雄教授退官記念国

○「訓読覚書」・「索引」は次号に掲載する。

1 ▼大乘本生心地觀經觀心品第十 八
2 ▼尔(の)時に、文殊師利菩薩摩訶薩・即座從(り)起チテ「て」・3 ▼衣服を整^正理して、偏^{ヒト}に右の肩を袒^{カタク}ギ、右(の)膝^{ヒザ}を地に着^{ツク}ケ、躬^{ミミ}ヲ曲^マゲ、掌^テ(を)合^{アハ}セテ佛(に)白^{マク}(し)て言^{イハ}(さく)・4 ▼「世尊、佛の所説の如し。妙徳等五百(の)長者に告はく『我、汝^{ナシヤチ}5 ▼等が為に心地(の)微妙(の)法門を敷^{ハキ}演^{エン}セ』ト。而も此の道場の无量无边の6 ▼人、天、大衆・皆渴仰を生ス。我、今、是レガ「が」為ニ「に」如^ク来に啓^ク問^トシタテマツル、云一7 ▼何ナルヲ力心と為、云何ナルをか地と為る。惟一願^{ネガ}(す)らくは、世尊、无缘の大慈・无礙の8 ▼大悲(をもて)・諸の衆生の為に分別(し)演説して、苦を離^ナ(れ)未^チる者をば、9 ▼苦を離ル、コトヲ「を」得令^ト(め)、安樂ナラ未^チる者ニハ安樂(することを)得令^ト(め)、發心(せ)未^チる者(には)發心(することを)得令^ト(め)、證果(なら)10 ▼未^チる(者)には證果(することを)得令^ト(め)、同(じ)く一道に於て「而」涅槃(を)得^テシメタマヘ』ト。

11 ▼尔(の)時(に)、薄伽梵、【以】无量劫の中に諸(の)福智^{フクチ}を修して、獲^テタマヘル所の12 ▼清淨(にして)決定(せる)勝法(の)大妙智印を以て、文殊師利を印して言^{ハク}はく、「善^ヨイ哉^カ13 ▼善哉・汝、今眞^{マコト}に是レ三世の佛母なり・一切(の)如來・修一^ト行^ト14 ▼地に在^{マシ}シトキ、皆會^{カウテ}曾^{カウテ}「て」引導して初(め)て信心を發^{オウ}サシメタリ。是の因縁を以(て)十方國土に正覺^{15 ▼}成^ルる者、皆文殊を以て「而」其の母(と)為^ス。然も、今汝が身、16 ▼本願力を以て菩薩相を現じて、如來に・不思議の法を請^ト問^ス。諦聽、17 ▼諦聽、善く之を思念(せよ)。吾、當に普く汝(が)為に分別(し)解説(せ)む」と。「唯し然なり、18 ▼世尊・我等聞^キキタベント樂^カフ」。
19 ▼尔(の)時に、薄伽梵・妙に善く一切如來の最勝住持・20 ▼平等性智・種種(の)希有の微妙の功德を成^ト就^スし、已に能く善く一21 ▼切諸佛の決定(の)勝法・大乘地印を獲^テ、已に善く一切22 ▼如來の金剛秘密・殊勝妙智を圓證し、已に能く无^ク下^タ※(の)大23 ▼悲の、自然に十方の有情を救攝するに安住し、已に善く妙觀察智の24 ▼不觀にして「而」觀^ス上^ヘ・不説に

して〔而〕説くを圓滿シタマヘリ。是に薄伽梵・諸佛
 (の)母(にして)无²⁵▼垢(の)大聖(たる)文
 殊師利菩薩摩訶薩に告(げ)て言(は)く、「大善男
 子、²⁶▽此の法をば名(づけ)て・十方の如來の最勝
 祕密心地法門と為、此(の)²⁷▽法をば名(づけ)て
 ・一切の凡夫の如來地に入る頓悟の法門と為、此(の)
 法をば²⁸▽名(づけ)て一切の菩薩の大菩提に趣く眞
 實の正路と為、此(の)法をば名(づけ)て²⁹▽三世
 の諸佛の自(ら)法樂を受(く)る微妙の寶宮^{上声}と
 為、此(の)法(をば)名(づけて)³⁰▼一切の・有
 情を饒益する无盡の寶藏と為、此(の)法は能く諸の
 菩薩³¹▽衆を引(き)て色究竟の自在智處に到ス、此
 (の)法は能く菩提樹に詣ス³²▽後身の菩薩を引く眞
 實の導師なり、此(の)法は能(く)世、出世の財を
 兩ルコト³³▽摩尼寶の衆生の願を滿ツルが如シ、此の
 法は能く十方三世の一切の³⁴▽諸佛の功德を生ずる本
 源なり。此の法は能(く)一切衆生の諸の惡業の³⁵▼
 果を銷ス、此の法(は)能(く)一切衆生の所求の
 願を與フル印なり。此の法は能く³⁶▽一切衆生の生死
 の險難を度す、此の法は能く一切衆生の苦³⁷▽海の波

浪を息ム、此の法は能く苦惱(の)衆生の〔而〕
 急難(を)作すを救フ、此(の)法(は)³⁸▽能く一
 切衆生の老病死(の)海を竭ス「す」。此(の)法
 (は)善く能く諸³⁹▽佛を出生する因縁(の)種子な
 り。此の法は能く生死の長夜の與フル^{タメ}大智炬^{上声}
 へ下欄外「トモシビ」▽為り、⁴⁰▼此(の)法(は)
 能く四魔の兵衆を破するに、而も甲冑作^{「カラチウ」コトリタリ}、此(の)
 (法(は)即(ち)是レ正(しく)⁴¹▽勇猛の軍ノ
 戰^{「セン」}一勝^{上声}の旌^{上声}旗^{上声}なり。此の法は
 即(ち)是(れ)一切諸佛の无上の⁴²▽法輪なり。此
 (の)法(は)即(ち)是(れ)最勝(の)法幢なり。
 此(の)法(は)即(ち)是(れ)大法の⁴³▽鼓を擊
 ツナリ、此(の)法(は)即(ち)是(れ)大法の螺
 を吹(く)なり、此(の)法は即(ち)是(れ)大師
 子王^{上声}なり。⁴⁴▽此(の)法(は)即(ち)是(れ)
 大師子吼なり、此(の)法(は)猶、國の大聖王の善
 く⁴⁵▼能く正シク治スルに、若し王の化に順ズれば
 大安樂を獲、若(し)王の化に違スれば尋デ「で」⁴⁶
 誅^{上声}滅^{上声}を被ル「る」が如し。善男子、三界の〔之
 〕中には心を以て主と爲。能く心を觀ずる者は⁴⁷▽究

竟して解脱す。観ずること能は不(る)者(モト)は究竟して沈(チム)淪(リン)す。衆生(の)「之」心は猶、⁴⁸▽大地の如し、五穀五果(は)大地従り生ず・是(の)如く心法(は)・世⁴⁹▽出世・善惡五趣・有學・無學・獨覺・菩薩・「及於」如⁵⁰▼來を生ず。是の因縁を以て三界唯心なり。心を名(づけ)て地と爲(す)、一切の凡夫・善友⁵¹▽親近して心地法を聞(き)て理の如(く)觀察し・説の如く修行し、自⁵²▽作(し)・教他(し)・讚(シ)勵(シ)・慶慰(シ)セン。是(の)如き「之」人は能く二障を断じ、速に⁵³▽衆行を圓にして疾ク「く」阿耨多羅三藐三菩提を得む」。尔(の)時(に)大聖(たる)⁵⁴▽文殊師利菩薩・佛(に)白(して)言(さく)・「世尊・佛の所説の如し、唯し⁵⁵▼心法を將(モ)チテ「もて」三界の主と爲(す)、心法は本元塵穢に染(せ)不(す)、云何(ニ)ゾ心⁵⁶▽法・貪瞋癡に染する、三世の法に於て誰をか説(き)て心と爲(す)、過去の心は已に⁵⁷▽滅し、未來の心は至(ラ)未(す)、現在の心は住(セ)不(す)、諸法の「之」内に性・不⁵⁸▽可得なり・諸法(の)「之」外(ニ)「に」相・不可得なり・諸法(の)中間に・都て不可⁵⁹▽得なり。心法(は)・本

来(ヨリ)コトカ 形相有(る)こと無し、心法(は)・本(モト)来(ヨリ)コトカ 住處有(る)こと無し。⁶⁰▼一切の如来(は)・尚(ほ)・心を見不(ス)「ず」、何(に)況(む)や)餘人・心法を見(る)こと得(テ)ンヤ。一⁶¹▽切(の)諸法は妄想従り生ず、是の因縁を以(て)今(イ)者、世尊・⁶²大▽衆の爲に三界唯一心を説(キ)タマフト、「願(は)くは佛・哀愍して實の如く解説シタマヘ」。⁶³▽尔(の)時(に)佛・文殊師利菩薩(に)告(げ)て言(たま)はく、「是(の)如し、是(の)如し。善男⁶⁴▽子・汝が所問の如し。心心所の法は本性空寂なり・我衆の喩を説(き)て、⁶⁵▼以(て)其の義を明(さ)む。善男子・心は幻法の如し、遍(ハ)計(ニ)由て、種種の⁶⁶▽心想を生じて、苦樂を受(くる)が故に・心(は)流水(の)如し、念念生滅して前後⁶⁷▽世に於て、暫(シ)クも住(セ)不(る)が故(に)」。心は大風の如(し)、一刹那の間に方所(ニ)歴(ル)が故(に)。⁶⁸▽心(は)燈焰の如し、衆縁和合して「而」生ずること得(る)が故(に)」。心(は)電(光)の如(し)、須臾(の)頃(ニ)して久(ク)住(セ)不(ル)が故(に)」。心(は)虚空(の)如(し)、客塵煩惱覆(

70 ▼ 障する所ナルが故(に)。心(は)猿^{「エン」}。猿^{ハ去声}サル
 猴^{コシコ} ^{ハ上声}の如(し)、五欲の樹^キに遊^{アソブ}びて、暫^{シバ} ^{ハ去声}シバラ
 住(せ)不(る)が故(に)。心は畫^エ ^{ハ平声} 71 ▼ 師の
 如(し)、能く世間の種種の色を畫するが故に。心
 (は) 僮^{ボク}一^{ヤツコ}僕^{ボク}(の)如し、諸煩惱の為に策^{シヤク} ^{ハ入声}一
 役^{ゴク} ^{ハ入声} 72 ▼ 所^{セラル} ^{ハ入声}が故(に)、心(は)獨行の如(し)
 、第二无(き)が故(に)。心(は)國王(の)如
 (し)、73 ▼ 種種の事を起^{オコ}スに、自在を得(る)が
 故(に)。心(は)怨家の如(し)、能(く)自身を
 して大^{オホ} 74 ▼ 苦を受^{ウケ}ケ令(むる)が故(に)。心(は)
 埃^{アヒ} ^{ハ去声}チリ塵^{チリ} ^{ハ上声}(の)如(し)、自身を※^シ ^{ハ去声}ケガス一
 汚^{ケガレ}して、雜穢を生ずるが故(に)。心(は)影^{ヤウ} ^{ハ平声}カゲ
 75 ▼ 像^{ゾウ} ^{ハ去声}カタチの如(し)、无常の法に於て、執して常と
 為るが故(に)。心は幻夢の如(し)、无我の法に於
 て、76 ▼ 執(し)て我と為るが故(に)。心(は)夜
 叉の如(し)、能(く)種種(の)功德法を※^ク ^{ハ去声}フ(が)
 故(に)。心は青^{アヲ} ^{ハ去声}一^{アラハ}蠅^{ハ上声} ^{ハ上声}(の) 77 ▼ 如(し)
 、穢惡を好^{ヨブ}ムガ故(に)。心(は)殺者の如^{ハマ} ^{ハ上声}す、能
 (く)身を害するが故(に)。心(は)78 ▼ 敵^{チヤク} ^{ハ去声}一^{アタ}對^{タイ}の
 如(し)、常に過^{オホ}を伺^{カガ}フが故に。心(は)盜^{タク} ^{ハ去声}一^ヌ

スビト賊^{ソク}(の)如(し)、功德を竊^{ヌス}ムガ「が」故(に)。
 心は大^{オホ} 79 ▼ 鼓の如(し)、鬪^{トウ}戰^{セン}を起(こす)が故(に)
 。心(は)飛^ヒ ^{ハ平声}トフ一^{アヘ}蛾^カ ^{ハ平声}ヒル(の)如(し)、燈^ト
 モシビー色を愛(する)が故(に)。心(は)野^ヤ ^{ハ上声}一^カ鹿^カ ^{ハ上声}
 入^{ハ入声} ^{ハ入声}(の)如(し)、假^カ一^カ聲^カを 80 ▼ 逐^{シツ} ^{ハ去声}フが故(に)。
 心は群^{グン}一^ウ猪^ウ ^{ハ平声}(の)如(し)、雜穢を樂^{オモ} ^{ハ去声}フ(が)故
 (に)。心(は)衆^{シュウ} ^{ハ去声}一^{ハチ}蜂^{ハチ} ^{ハ去声}(の)如(し)、81 ▼
 密^ミ味^ミを集^{アツ}マルが故(に)。心(は)醉^{スイ}象^{ゾウ}(の)如(し)
 、牝^メ ^{ハ平声}一^メ觸^{フケ}に耽^{オモ}ル(が)故(に)。善男子・是(の)
 如(き)所^{トコロ} 82 ▼ 説の心、心所の法は内无(く)外无
 (く)亦中間無し。諸法の中に於て 83 ▼ 求^{モト}ムルに得^エ可^キ
 (から)不^ズ。去來現在にも亦得可(から)不^ズ。三世に
 超越して 84 ▼ 有に非ず、无に非ず、心^{ココロ}(に)染着を懷
 (き)て妄縁に従(ひ)て現ず。縁(に)自性无く、
 心性 85 ▼ 本^{ホトトギス} ^{ハ去声}空^{クウ}シ。是(の)如(き)空性(は)・生
 (ぜ)不^ズ、滅(せ)不^ズ、來无く、去无(し)、一に不^ズ
 ズ、86 ▼ 異に不(ず)、断に非ず、常に非(ず)、本
 (より)・生處无く、亦滅處无く、亦遠離に非ず、不
 遠離(に) 87 ▼ 非ず、是(の)如(き)心等(は)・
 无為に異^{コト}ナラ不^ズ、无為之體(は)・88 ▼ 心等に異(な

(ら)不、心法之體(は)・本(より)説(く)可(か
 ら)不、心法に非(アラサルモ)者(も)亦説(く) 89▽可(から)
 不。何を以(て)の故に、若(し)・无為是(レ)心ナラ
 バ即(ち)断見と名(づ)く、若(し)心 90▽法を
 離(セ)バ即(ち)常見に名(づ)く、永(く)二相を離(ハ)
 レて二邊に着(せ)不。是(の)如(く)悟(ル)者(モ)を
 真諦を見(る)と 91▽名(づ)く。真諦を悟(る)者
 を名(づ)けて賢聖と為(す)。一切の賢聖・性 92▽本(よ
 り)空寂の无為の法の中に戒、持犯(ホム)无(く)亦小大无(く)、
 93▽心王(と)「及」心所の法(と)有(ること)无
 く、苦无(く)樂无(し)、是(の)如(く)法界は自性・ 94
 ▽垢无(く)、上中下の差別の「之」相无(し)。何を以(て)
 の故に・是(レ)无為の法は性 95▽平等(の)故なり。
 【如】衆の河(ヘ)水(ノ)、海の中に流(ル)入(ル)シヌレバ、
 盡(ク)ク「く」同「く」一味にして別 96▽相无(き)
 が如(キ)故に。此の无垢の性は是は無等等なり・「於」
 我を遠離(ス)し「及」我 97▽所を離(ハ)レタリ。此(の)无垢
 性は實に非(ず)、虚に非(ず)、此(の)无垢性は是(レ)れ
 第一義なり。盡滅の相 98▽无(く)、體本(より)生(ぜ)
 不。此の无垢性は常住不變なり。最 99▽勝涅槃・我樂

淨の故に。此(の)无垢の性は一切の平不 100▽平
 等を遠離(セ)り、體異(キ)无(き)「く」が故に。若(し)善男
 子善女人有(り)て、阿 101▽耨多羅三藐三菩提を求
 (めむ)と欲(オモ)ハ(ン)者(モ)は、當に一心に是(の)如(キ) 102
 ▽心地觀の法を修習(ス)應(ス)し。尔(の)時(に)世尊・
 重(ね)て・此の義を宣(ノ)ベント欲(オモ)シテ「而」偈(ヲ)を説
 (き)て言(ク)ハク、 103▽「三世(の)覺母妙吉祥(は)
 ・如來に心地法を請(ク)問(フ)シタテマツル。 104▽我、今
 ・此の大會衆に於(テ)、成佛の觀行門を開演(ス)。 105▽
 此(の)法は遇(フ)ヒ難(カ)キコト、優曇(ニ)過(ぎ)タリ。一
 切世間・渴仰(ス)應(ス)し。 106▽十方の諸佛の大覺を證(シ)
 タマヘル、此の法從(リ)シテ修(ス)成(ス)セ不(ズ)トイフコト无(し)。
 107▽我、是(レ)无(上)調御師として、正法輪を轉(ジ)て世
 界に周(ル)シ、无量の諸の衆生を 108▽化度(ス)すること、
 當に知る《當》(し)、心地觀を悟(サトル)「る」に由(テ)
 なり。 109▽一切有情、此の法を蒙(ル)ハ菩提(ニ)欣(ブ) 110▽
 一趣(ス)し授記(ヲ)得(ル)。 110▽一切有縁・得記の人・此の
 觀門を修(シ)て、當に佛に作(ル)《當》し。 111▽諸佛の
 自(ラ)大法樂を受(ク)る、心地觀の妙寶宮に住(ス)。 1
 12▽受(ク)職(シ)の菩薩の无生(ヲ)を悟(サトル)サトル、心地門を觀(シ)

て法界に遍す。113▽後身の菩薩の覺樹に坐する、此の觀行に入(り)て菩提を證す。114▽此の法は能(く)七聖財を雨ル。衆生の願を満ツル摩尼寶なり。115

▼此(の)法をば名(づけ)て佛の本母と為(す)。三世の三佛身を出生す。116▽此(の)法をば名(づけ)て金剛甲と為(す)、能く四衆の諸の魔軍を敵(す)。117▽此(の)法は能(く)大舟(シラ)航(カサ)作り。中流に渡りて寶所に至ラ令む。118▽此(の)法は最勝の大法鼓なり。此(の)法(は)高顯の大法幢なり。119

▽此(の)法は金剛(の)大法螺(ラシラ)なり。此(の)法は世を照ス大法炬(テラ)なり。120▼此(の)法は猶、大聖王の功を賞(シヤウ)し、過(トガ)を罰(ハチ)スルコト、人の心に順(シタガ)フ(が)如し。121▽此(の)法は、猶、沃(オウ)潤(ジュン)の田の如(し)、生(ハチ)成(ハチ)成(ハチ)長養、時(シ)候(コウ)依(イ)る。122▽我、衆の喩(ユ)を以て空の義を明(アカ)す。是(コ)に知(シ)リヌ。123▽三界は唯し一心なり。▽心は大力有(ハチ)て世界生(ハチ)ず・自在に能く為(ス)ル。變化の主なり。124▽悪想善心・更に過現未來の生死の因を造集す。125▼妄業に依止して、世間の受非愛(オウ)の果有(ハチ)て恒(ツネ)に相續(ツネ)す。126▽

心は流水の如し、暫(シバ)クも住(ス)せ不(ス)。心(は)飄(ハチ)風(ハチ)の如(し)、國土を過(ス)す。127▽亦(ハチ)は猿(ユ)猴(コウ)の、樹に依(リ)て戯(カッ)ル、が如し、亦(ハチ)は幻事の幻に依(リ)て成(ス)ずるが如し。128▽空の飛鳥(ヒトリ)の尋(タツ)メル所无(キ)が如し、空(の)聚落の人奔(ハシ)リ走(ハシ)ルガ「が」如(し)。129▽是(の)如(キ)心法・本(より)有(に)非(ズ)。凡夫の執(ミ)迷(ミ)ヒて无(に)非(ズ)と謂(オモ)フ。130▼若(し)能(ク)心の體性空なりと觀(ズ)れば、惑障生(ズ)ゼ不(ス)して便(チ)解脱(シ)ヌ」。

131▽尔(の)時(に)如(來)・諸の衆生に於(て)大悲心(を)起(オコ)シタマフコト、猶、父母の、一子(を)愛(ス)念(ス)するが如(く)して、世間の大力の邪見(を)滅(ス)し、一切(を)シタマフ、曰(ク)。

134▽※一室(シチ)他(タ)波(ハ)羅(ラ)底(チ)吠(ヘイ)憚(タン)迦(キヤ)盧(ロ)弭(ミ)

135▼尔(の)時(に)如(來)・真言(を)説(ト)キ已(リ)て、文殊師利菩薩摩訶(サ)薩(ツ)に告(ツ)ゲタマハク、「是(の)如(く)神咒(は)大威力(を)具(ツ)せり、若(し)善男子善女人有(ハチ)て是(の)咒(を)持(チ)セン時(に)は、清淨(の)手

を擧ゲヨ。左右十指、更^経互^五に相ヒ又レヨ。138
▽右を以(て)左を押セ。更ニ「に」相ヒ堅ク握ルコ
ト縛着の形の如(く)セヨ。金剛縛印と名(づ)く。
139▽此の印を成し已(り)て前の真言を習セヨ、一
遍を盈^ち満^上セバ、十二140▼部経を「於」讀
一念するに勝レタリ。所獲の功德・限一量有ルコト无
し。「乃至」、菩提マデ・復(た)退¹⁴¹轉(せ)
不^ず。

142▽大乘本生心地觀經發菩提品第十一

143▽尔(の)時(に)薄伽梵、已に能く善く一切如
來(の)灌頂(の)寶冠の三界に144▽超過セルヲ獲、
已に陀羅尼自在を圓滿すること得、已に善く145▼
三摩地自在を圓證し、妙に善く一切智智一切種智を成
就したり。146▽能(く)有情の種種の差別を作ス。
時に薄伽梵・諸の衆生の為に觀心妙法門を宣147▽説
シタマフコト已(り)て文殊師利菩薩摩訶薩に告(げ)
て148▽言ハク、「大善男子・我衆生の為に已に心地
を説イツ、亦復、當に149▽發菩提心大陀羅尼を説(き
て諸の有情をして阿耨多羅150▼三藐三菩提の心

を發シ、速(か)に妙果を圓力に令ム「む」《當》し」
。尔(の)時(に)文殊師利菩薩151▽薩・佛(に)白
(して)言(さく)。「世尊・佛の説(き)タマフ所
の如キ過去・已に滅す、未來152▽至(ら)未、現在
住(せ)不、三世所有の一切の心法・本性(は)皆空
なり。153▽彼の菩提心・何を説イテか、發「心」と
名(づ)くる。善哉、世尊、願(は)くは為に解脱し
て諸の疑網を154▽断チて菩提に趣カ「か」令シメタマヘ、マヘ」
。佛、文殊師利に告(は)く、「善男子、155▼諸の
心法の中に衆の邪見を起(こ)す、六十二見(の)種
156▽種(の)見を除断セント欲フが為の故に。心
心所の法を、我・説(き)て空と為。是(の)如
(き)諸見・依157▽止无(き)が故に、譬(へ)ば、
【如】叢林の蒙^ム密^キ、茂^ム盛^ムナルヲモテ「て」師子・白象・虎・狼・惡158▽獸・其
の中に潜^セ住^スして毒一發して人を害し、迴
カニ「に」行く跡ヲ「を」絶ツ、時に・智者有(り)て火
159▽を以て林を焼^スく、林空シキに因ルが故に、
諸の大惡獸、復(た)遺^ト餘^ナ无キが如し。心
160▼空にして見滅すること、亦復是(の)如(し)。

又、善男子・何の因縁を以(て)か空の 161▽義を立ツル「る」耶。煩惱を滅センが為に妄心の生に從へて「而」是レ空なりと説く。善男子、162▽若(し)空の理を執して究竟と為る者は空の性も亦空にナル。空を執して病を作ス、亦除遣す 163▽應し。何(を)以(ての)故に若(し)空の義を執して究竟と為(者)、「諸(の)法、皆 164▽空(に)して因无く果無し。路^ロ 伽^カ 耶^ヤ 陀^タ」何の差別か有(ら)む。善男子、 165▽阿 伽 陀の藥の如(く)、能(く)諸の病を療^{リョウ}す、若(し)病^{ヤマヒ}有る者は之を服(せ)ば必(ず)差^サユ。其(の)病^{ヤマヒ}无(き)に藥を服(せ)ば、藥還(り)て病を成^{ナス}ス「す」。善男 167▽子、本・空の藥^{クスリ}を設^{マウ}ケシコトハ、有る病を除^クカム為なり、有を執して病を成^{ナス}セバ空を執セン(も)亦然なり。 168▽誰の有智の者か藥を服(し)て病を取^トラン。善男子、若(し)有の見を起(こ)サンは、 169▽空の見を起(こす)に勝^{マツ}レタリ。空ヲモテ有の病を治す。藥の空を治する(こと)無し。善男子、是の因縁を以(て)「於」空の藥を

70▽服(し)て邪見を除^クキ已^マナば、自^ミラ・心を覺^{サト}悟して能く菩提を發せ。此の 171▽覺悟の心は即(ち)菩提心なり、二相有^アルコト无(し)。善男子・自覺^{ジカク}悟^ト 172▽心に其の四種有(り)、云何(なる)をか四と為^スる、謂はく、諸の凡夫に二種の心有(り)、 173▽諸(の)佛・菩薩に・二種の心有(り)。善男子・凡夫の二心(とは)其の相 174▽云何^{イカ}ニゾ。一者^ハ眼識「乃至」意識・同(じ)く自境を縁^エスレバ自悟^{ジブツ} 175▽心と名(づ)く、二者五根を「於」離(れて)心心所の法・和合して境^{キョウ}を縁^エス「す」レば自^ジ 176▽悟心と名(づ)く、善男子、是(の)如(き)二心・能(く)菩提を發す。善男子、 177▽賢聖の二心(とは)・其の相^{イカ}云何^ニゾ。一者真實の理を觀ずる智・二 178▽者一切(の)境を觀ずる智なり。善男子、是(の)如(き)四種を自悟心と名(づ)く。 179▽尔(の)時(に)文殊師利菩薩、佛(に)白(して)言(さく)・「世尊、心(は)形相无^ク 180▽亦住處無し。凡夫の行者の最初(の)發心(は)・何等の處に依(り)て 181▽何等の相をか觀ゼン」ト。佛(の)言(はく)・「善男子・凡夫の所觀^カの菩提

心の相は、猶、清淨圓滿（なる）182▽月輪の如し。
 胸臆オソネの上に於て明アカキラカ朗ウラ朗ウラニして「而」住す、
 若（し）183▽速（か）に不退轉を得むと欲ハン者ハ
 「は」、阿蘭ウラン若（し）「及」空ムナシク寂シツカナルの室ムロに
 在（り）て、身を端ナホクシ 184▽念オモヒを正タダシクして前の
 如來金剛縛印を結（び）て目を冥ヒサイデ臆オソネの中の明 185
 ▼月を觀一察して是の思惟を作せ、是の滿月輪は五
 十由旬・无垢明淨・186▽内外澄※・最極清涼なり。
 月・即（ち）是（れ）心・心即（ち）是（れ）月なり。
 塵チシ塵チシ塵チシ187▽翳エイ（も）染すること無く、妄想（も）
 生ぜ不、能（く）衆生をして身心清淨ナラ令（む）、
 大菩 188▽提心・堅固にして退（か）不。此（の）手
 印インを結（び）て大菩提 189▽心（の）微妙（なる）
 章句（たる）一切菩薩（の）最初發心（の）清淨真言
 を持一念一觀一察セヨ、
 190▽※一・菩ホ・地チ・室シチ・多タ・
 牟モ・致チ・波ハ・陀ダ・弭ミ・
 191▽此（の）陀羅尼は大威徳を具せり。能く行者を
 して復退轉セ不サラ令ム。去 192▽来現在の一切菩薩・
 因地に「於」在りて初（め）て發一心セシ時・悉皆、

念を 193▽專（ら）にして此の真言を持ち、不退の地
 に入り、速（か）に正覺を圓マカニセリ「せり」。善男
 子、194▽時に彼の行者・身を端ナホクし念を正タダシクして
 都ステ「て」動一揺ユウセ不サして心を・月輪に繫カケて成
 一 195▼熟觀一察セヨ。是を菩薩觀菩提心成佛三昧
 と名（づ）く。若（し）196▽凡夫有（り）て此の觀
 を修シユセン者は起（こ）す所の五逆四重十惡及一闍セシ 197
 ▼提・是（の）如（き）等の罪盡く皆消滅して、即
 （ち）、五種の三摩地門を獲トクン。198▽云何ナルヲカ
 「をか」五と為る、一に者ハ刹那三昧・二（に）者微塵
 三昧・三（に）199▽者白縷ル三昧・四（に）者起
 伏三昧・五（に）者安住三昧なり。200▼云何ナル
 ヲカ名（づ）けて刹那三昧と為る、謂（はく）暫シハク
 「く」滿一月を想一念して「而」住す。譬（へ）ば 2
 01▽【如】※コシ、コシ、コシの身に繫ツナガレタル所有ル、遠トヲザカ
 ルニ去ルコト得不ズ、近チカツクニ停トムマルコト得不ズ、唯飢一
 渴カニ 202▽困カシンで須臾住止するが如く。凡夫の觀心
 す、亦復是（の）如（し）。暫シハク 203▽三昧を得ウルラ
 「を」名（づ）けて刹那と為。云何（なるをか）名
 （づ）けて）微塵三昧（と）為ス、謂（はく）三 204

▽味に於て少分相応す。譬（へ）ば【如】人有（り）て常に自ラ苦キヲ「き」食フ、曾タ「て」甜キを食（らは）末、一時の中に 205 ▼ 於（て）一塵の蜜を・舌根に「於」到ルコトを得て勝一歡喜を増シ、倍く踊躍を 206 ▼ 生じて更に多塵を求（むる）が如く、是の如く行者・長劫を「於」経テ「て」衆の苦一 207 ▼ 味を食して、「而」今、甘 208 ▼ 甜 209 ▼ の三昧と「與」少分相一應すること得るを名（づけ）て微塵と為。20 8 ▼ 云何（なるをか）名（づけて）白縷 210 ▼ 三昧（と）為る。謂（は）く、凡夫の人・无始の時自リ 209 ▼ 未来際を盡す、今・此の定を得タリ。譬（へ）ば【如】染一※ 211 ▼ の多くの黒色の中に一の 210 ▼ 白縷シロキトを見（る）が如く。是（の）如（く）行者、多（く）の生死の暗闇夜の中（に）於（て）、而も今方に白淨の三昧を 211 ▼ 得タルを名（づけ）て「之」縷と為。云何ナルヲか名（づけ）て起伏三昧と為る、 212 ▼ 所謂行者（の）・觀心・熟せ未「ず」、或ルトキには善（く）成立し、善（く）成立せ未。 213 ▼ 是（の）如（く）三昧・秤 214 ▼ の低 215 ▼ 昂 216 ▼ の猶クナルを名（づけ）て起伏と為「す」。云何（な

る）をか名（づけて）安住 214 ▼ 三昧と為る、前の四の定を修して、心、安住すること得、善く能く守護して諸の 215 ▼ 塵に染マ不ルなり。【如】人の、夏の中に遠ク「く」砂 216 ▼ 磧 217 ▼ を涉りて備に炎毒を受ケて其の心渴 218 ▼ 乏して殆く堪フル所无（き）が、忽チに雪山の甘 219 ▼ 美 220 ▼ の「之」水・天の蘇 221 ▼ 陀 222 ▼ を得て、 223 ▼ 頓力に熱一悩を除キ身意泰然ナランが如（し）。是（の）故に三昧を名（づけ）て安住と為。此の 218 ▼ 定に入り已（り）て惑障を遠離して无上菩提の「之」芽を發生し、速ヤカニ菩 219 ▼ 薩の功德十地に登ル「る」。尔（の）時（に）會中の无量の人天・此の甚深の 220 ▼ 諸菩薩（の）母・不可思議（の）大陀羅尼を聞、已（り）て、九萬八千の 221 ▼ 諸の菩薩等（は）・觀喜地を證し无量（の）衆生（は）阿耨多羅 222 ▼ 三藐三菩提の心を發シキ。

223 ▼ 大乘本生心地觀經成佛品第十二
224 ▼ 尔（の）時に薄伽梵・能く善く清淨法界に安住して、三世平等にして始 225 ▼ 无く終 226 ▼ 无く

不動凝然にして常に断盡無く、大智（の）光明（は）
 ・普く世界を²²⁶▽照し、善巧の方便（は）・變現神通（し）・十方の土を化す。²²⁷▽周遍（せ）^{*}不^{*}といフコト靡シ「し」。是に薄伽梵・文殊師利菩薩摩訶薩（に）告（げ）て²²⁸▽言ハク・瑜^ユ伽^カ行者（は）
 （は）・月輪を觀じ已（り）て、三種の大秘密の法を觀ず應し。²²⁹▽云何ナルをか三と為る、一は「者」心秘密。二（は）「者」語秘密。三（は）「者」身²³⁰▽秘密なり。云何（なる）をか名（づけ）て心秘密の法と為る、瑜伽行者（は）・【觀】満月の²³¹▽中に金色の五股金剛を出し生ず、光明（は）煥然^ハ平^平聲^聲トシテ猶・鎔^{ヨウ}金^{カネ}の如し、「於」無數の大白光明を²³²▽放ツト觀ゼヨ、是の觀察を以て心秘密と名（づ）く。云²³³▽何（なる）をか名（づけ）て語言秘密と為る。

²³⁴▽※一・地^チ室^{シヤウ}多^タ婆^ハ尔^ニ
 羅^ラ 三^三 吽^フ
²³⁵▼是の大神呪は大威力を具せり。一切の菩薩の成佛の真言なり。是の²³⁶▽故に名（づけ）て語言秘密と為。云何（なる）をか名（づけ）て身秘密法と為る。

道²³⁷▽場の中に於て身を端クシ念を正シウして、手に引導无上菩提最第一²³⁸▽印を結（び）て、胸臆の心月輪の中^ナに安置するなり、善男子・我當（に）汝が為に²³⁹▽其の印相を説（か）む、先（づ）左右（の）（の）二大母指（を）以（て）・各（の）左右（の）手掌（の）²⁴⁰▽「之」内（に）入（れ）・各（の）左右（の）頭指中指〔及〕名小指（を）以（て）・堅（く）²⁴¹▽母指（を）握^{「アクリアク」}（し）・拳（を）〔於〕作（る）・即（ち）是（れ）・堅牢金剛拳印（なり）・次（に）改拳^{「カク」}（せ）不（して）・左頭指（を）²⁴²▽舒^{「シュ」}（し）・虚空（に）直豎^{「シュ」}（す）・其（の）左拳（を）以（て）・〔於〕心上（に）着（け）・右²⁴³▽拳（の）小指（は）・左拳（の）頭指（の）〔於〕一節（を）堅^{「カク」}握^{「アクリ」}（し）・次（に）右拳（の）頭²⁴⁴▽指（の）〔之〕頭（を）以（て）・即（ち）右拳（の）拇^{「モ」}指（の）一節（を）指（し）・亦心前（に）着（く）・是（を）²⁴⁵▼引導・无上菩提・第一智印（と）名（づく）・亦能滅・无明黒²⁴⁶▽闇・大光明印（と）名（づく）・此の印を結（び）て加し持する力を以（て）の故に十

方の諸佛（は）・行者の頂を²⁴⁷▽摩^ナデ、大菩提勝決
 定の記を授^{*}（け）タマフ。是レ大毘盧遮那²⁴⁸▽如來
 の无盡福聚大妙智印なり。尔（の）時（に）行者・此
 の印を結^{ムス}ビ²⁴⁹▽已（り）て即（ち）此の觀を作^{ツク}レ。
 一切（の）有情・共に此の印を結（び）て真言を持念
 す。²⁵⁰▽十方世界（に）・三惡道・八難の苦果无
 し、同（じ）く第一清²⁵¹▽淨法樂を受く。我今首^{カウキ}
 の上に・大寶冠有（り）、其の天冠の中に五佛²⁵²▽
 如來結跏趺座シタマヘリ。我は是（れ）毘盧遮那如來
 なり・三十二相八十種好^{ハハシ}を圓^ル一滿^ル一具^ル一²⁵³▽足
 して大光明を放（ち）て十方界を照し、一切衆生を²
⁵⁴▽利^ル一益^ル一安^ル一樂^ス。是の如く觀察するを毘盧遮²
⁵⁵▽那如來最勝三昧に入ると名（づ）く。譬（へば）
 【如】人有（り）て迦^ル盧^{ハハシ}羅微妙觀²⁵⁶▽門を悟^{サト}レ
 リ。自（ら）是の觀を作^{ツク}ル、我が身は即（ち）是（れ）
 金翅鳥王なり。心・意・語言・²⁵⁷▽亦復、是（の）
 如（し）、此の觀力を以て能（く）毒藥を消す、一切
 の惡毒・害を為スコト²⁵⁸▽能は不るが如く。凡夫の
 行者も亦復是（の）如し。降伏の坐を作りて身²⁵⁹▽
 動揺^{ハハシ}セ不^ズ、手に智印を結ビ密に真言を念じ、心^{ココロ}

此（の）觀に入^レバ、能（く）三²⁶⁰▽毒を滅し、
 業障を消除し、福智を増長す、世出世の願（は）・速
 に圓滿すること得^ツ。261▽八万四千の諸（の）煩惱障
 （は）・現起すること能（は）不^ズ。恒河沙等の所²⁶²
 ▽知（の）重障（は）・漸^{ヤウ}漸に消滅す、無漏の大智
 ・能^ル一断^ル一金^一剛般若²⁶³▽波羅密・現前に圓滿して
 速に阿耨多羅三藐三菩²⁶⁴▽提を得む。尔（の）時
 （に）文殊師利菩薩・佛（に）白（して）言（さく）
 ・「希有なり世尊・希²⁶⁵▽有なり善逝・如來・世
 に出^イデタマフこと優曇花に過^スギタリ、假^{カク}使^ヒ世に出（で
 ）タマヘリトモ、是の²⁶⁶▽法を説くこと難し。是
 （の）如キ心地の三種祕密・无上法輪は能く善く一切
 衆生を利²⁶⁷▽樂す。如來地（と）〔及〕菩薩地に入^レ
 ル真實の正路なり。²⁶⁸▽若（し）衆生有（り）て
 身命を惜（ま）不^ズ此の法を修行センハ、速に菩提を證
 す。尔（の）²⁶⁹▽時（に）佛、文殊師利菩薩（に）
 告（げ）て言（はく）・「若（し）善男子善女²⁷⁰▽
 人有（り）て、三種（の）祕密（の）成佛妙門を修習
 して早（く）如來の²⁷¹▽功德の身を獲^トンコトを得
 （んと）欲^ホセンは〔者〕、當に菩薩の三十二種の大金

剛(の)甲を着ル「る」《當》し。272▽此の妙觀を修センに必ず如來の清淨法身を證す。云何(なる)をか名(づけ)て・三十273▽二の甲と為る、一は「者」无量劫に於(て)衆生の為の故に生死を厭ハ不して274▽苦を受(く)る大甲・二(は)「者」誓(ひ)て无量の有情を度(し)て、「乃至」虻^{「ロウ」} △平声▽ケラ 蟻^{「ロウ」} △平声▽アリ「マデ」「マデ」捨(て)不る275▼大甲・三(は)「者」衆生の生死の長キ夢^{「ユメ」}を覺悟^{「サマシテ」}して三種祕^{「ヒツ」}276▽密に安置する大甲・四(は)「者」佛法を擁護して、一切一時に於(て)猶、響^{「ウタ」} △平声▽應 △平声▽の如(く)して法を277▽護ル大甲・五(は)「者」永^{「トキ」}能く有^{「アリ」}無^{「ナシ」}の二一見を起(こ)す一切の煩^{「マン」}278▽惱を滅する金剛大甲・六(は)「者」頭目髓腦妻子珍寶・来^{「キ」}リ279▽求^{「モトメ」}ム(る)こと有る者に能く捨(つ)る大甲・七(は)「者」家の中の所受の一切の樂一具・永く貪着せ280▼不(し)て能く施する大甲・八(は)「者」能く菩薩の三聚淨戒を持^{「モトメ」}チ、281▽「及」頭陀を捨離せ不る大甲・九(は)「者」忍辱の衣^{「コロモ」}を着^{「キ」}テ「て」諸の違^{「チガハシ」}282▽縁・毀^{「クサシ」} △平声▽罵 △平声▽打に遇^{「アヒ」}フに報せ不る大甲・十(は)「者」所有の一切の縁283▽覺聲聞を教化

して一乘に趣^{「モトメ」}キ、廻^{「クハシ」} △平声▽心 △平声▽「せ」令(む)る大甲・十一(は)「者」譬(へ)ば大284▽風の、晝夜に歇^{「ヤス}マ不(る)が如く諸(の)有情を度^{「ワタス}ス「す」精進(の)大甲・十二(は)「者」身^{「ミ」}285▼心寂靜にして口^{「クチ}に過犯^{「クハシ}無く解脱三昧を修^{「シユ}行する大甲・十三286▽「は)「者」生死涅槃に二見有(る)こと无(く)して、衆生を饒益するに平等ナル大甲・287▽十四(は)「者」无縁の大慈・群品を利益するに恒^{「ツネ}に厭捨^{「イヤシ}无(く)して樂を與^{「ユ}フル「る」288▽大甲・十五(は)「者」无礙大悲・一切を救摂するに限量有^{「ア}ルコト无(く)して苦を289▽抜^{「ヒキ}ク大甲・十六(は)「者」諸の衆生に於て怨^{「ウラミ} △平声▽結有(る)こと无(く)して恒に290▼饒益を作す大喜(の)大甲・十七(は)「者」難^{「タシ}行^{「タシ}苦行に劬^{「ウツ} △平声▽勞 △平声▽を憚^{「ハシ}ラ不^{「シ}して291▽恒^{「ツネ}に退轉(すること)无^{「シ}き大捨(の)大甲・十八(は)「者」苦有^{「ア}ル衆生・菩^{「ボ}薩^{「ツ}の所に来るに、彼に代(り)て苦を受(け)て厭^{「イヤ}ハ不^{「シ}る大甲・十九(は)「者」掌の中の293▽阿摩勒果を觀^{「ミ} △平声▽が如く、是(の)如(く)能(く)解脱を見る大甲・二十(は)「者」五^{「イ} △平声▽蘊^{「イ}の身は旃陀羅の如しト見て損害と善事とヲ

「を」着（はすこと）无キ大甲・二十一 295▼（は）
 「者」十二入は空聚落の如（し）ト見て常に恐怖を懐
 イテ「て」厭捨する大甲・296▼二十二（は）「者」
 十八界は、猶、幻化の如し、眞實有（る）こと無しと
 見る大 297▼智（の）大甲・二十三（は）「者」一切
 の法は法界に「於」同（じ）と見て、298▼衆相を見
 不る證眞^{ハ去声}（の）大甲・二十四（は）「者」他人の
 惡を掩^{オホ}ヒ、己ガ 299▼過を蔵^{カタキス}（さ）不三界を厭離す
 る出世（の）大甲・二十五（は）「者」大醫王の、病
 に 300▼應^{カマ}ヘテ藥を與^{アタ}フルが如く、菩薩（の）宜に
 隨（ひ）て演化する大甲・二十六（は）「者」301▼
 彼の三乘體・本異ナラ不ト見て究竟して心を廻ラし一
 に歸^{ハ上声}セシムル大甲・二十 302▼七（は）「者」三
 寶の種を紹^ツイデ「て」断絶せ不ラ使ムトシテ妙法輪を
 轉じて人を度す大 303▼甲・二十八（は）「者」佛・
 衆生に於て大恩徳有^{アジ}くす、佛恩を報^{ハ去声}ゼンが為に
 道を 304▼修する大甲・二十九（は）「者」一切の法
 は本性空寂なり、 305▼生（ぜ）不、滅（せ）不と
 觀ずる无垢（の）大甲・三十（は）「者」无生忍を悟^{サト}
 リ陀羅 306▼尼樂說辯才を得る无礙（の）大甲・三十

一（は）「者」廣く有情を化して菩提樹に 307▼坐セ
 シメ佛果を證（せ）令（む）る一味（の）大甲・三十
 二（は）「者」一 308▼利那の心・般若と相應して三
 世の法を悟ルコト餘无キ大甲なり。是を 309▼菩薩
 摩訶薩の三十二種の金剛大甲と名（づ）く。文殊師利
 310▼菩薩・若（し）善男子善女人有（り）て、身
 に是（の）如（き）金剛甲^{カト} 311▼冑^ウを被^キテハ
 當に勤^{ツク}メテ「て」三種の祕密を修^シ習す^ハ當^ニ。現
 世の中に於（て）大福智を具して、312▼速に无上正
 等菩提を證セン。尔（の）時（に）大聖文殊師利菩
 313▼薩摩訶薩・「及」諸の大衆・【聞】佛の所説の
 三種（の）祕密心 314▼地妙法・「及」三十二金剛甲
 冑・一切の菩薩の 315▼學する所に應^{ハ去声}ゼル處^{トコロ}ナ
 ルを聞キタマへて、各・无價の瓔珞寶衣を脱^ヌイデ「て」
 、毘盧遮那如 316▼來・「及」十方の世尊に供養シタ
 テマツル、而して佛を讚（し）て言サク、「善哉善哉
 ・佛薄伽 317▼梵・无邊の菩薩の行願を演説して一切
 衆生を利益安樂し、凡夫の身を 318▼捨テ、佛地に入
 ラ使^シメタマフ。今^{イマ}者我等海^{ウミ}會の大衆・佛恩を 31
 9▼報ゼンが為に身命を惜シマズ「不」して諸の衆生

の為に諸の佛土に遍して、此の微妙の法を分一別（し）
 演 320 ▼ 説し、受持（し）讀誦（し）書寫（し）流
 布して断一絶せ不（ら）令メム。321 ▼ 唯願（く）
 は、如來、遙力に護念を垂レタマヘ」。尔（の）時に
 大會・此（の）妙法を聞（き）て 322 ▼ 大饒益を得、
 称計（す）可（から）不る无數（の）菩薩（は）・各、
 不退 323 ▼ 轉の位に證一悟すること得。一切の人天
 （は）・皆勝利を獲。「乃至」五趣の一切有 324 ▼ 情
 （は）・諸の重障を断チテ 无量の樂を得、悉く皆當
 に阿耨多羅 325 ▼ 三藐三菩提を得《當》カリキ。
 326 ▼ 大乘本生心地觀經囑累品第十三
 327 ▼ 尔（の）時（に）釋迦牟尼如來・文殊師利菩薩
 等の阿 328 ▼ 僧祇海會（の）大衆に告（げ）て言（は
 く）・「我・〔於〕无量那※多百千（の）大 329 ▼ 劫
 に身命を惜シマズ〔不〕して、頭目手足・血 330 ▼ 六
 骨髓・妻子國城・330 ▼ 一切の珍寶・来り求ムルこ
 と有る者悉く用テ〔て〕布施し・百千の難 331 ▼ 行苦
 行を修習して大乘心地觀門を獲一證せり。今此の法を
 以て 332 ▼ 汝等に付囑す。當（に）知（る）《當》

（し）、此の甚深の經は十方三世の无上十力の〔之〕
 宣一説シタマフ 333 ▼ 所なり。是（の）如（く）經寶
 は最極微妙にして能く有情の一切の 334 ▼ 利益を為す、
 〔於〕此の三千大千世界・十方の諸佛の國土の〔之〕
 335 ▼ 中に有る所の无边の諸の有情類・傍生餓鬼・地
 獄の衆生・此の大乘心地觀經の殊勝の功德・威神の
 〔之〕力に 336 ▼ 由（り）て、諸一苦を 337 ▼ 離レ安
 樂（を）受（くる）ことを得令む。是（の）如（く）
 經力は福德思（ひ）難し。能く 338 ▼ 所在の國土をし
 て豊樂にして諸の怨敵无カラ令む。譬（へ）ば、【如】
 人有（り）て如意 339 ▼ 珠を得て、〔於〕家の中に置
 イて能く一切の殊妙の樂具を生ずるが如く、此の妙經
 寶、340 ▼ 亦復、是（の）如（し）。能く國界に无盡
 の安樂を與フ。亦、【如】三十三 341 ▼ 天の末尼の天
 鼓ツミの・能く種種の百千の音聲を出して、彼の天衆
 をして諸の快樂を 342 ▼ 受（け）令（む）るが如く、
 此の經の法鼓も亦復是（の）如（し）。能（く）國界
 をして最 343 ▼ 勝安樂ナラ令む。是の因縁を以て汝等
 大衆・大忍力に住して 344 ▼ 此の經を流通セヨ」。尔
 （の）時（に）文殊師利菩薩・佛に白（して）言（さ

く)。「世尊、希有なり、³⁴⁵▼如來、希有なり、善逝・乃^{イッ}・甚深の大乗微妙(の)心地觀³⁴⁶▼經を説(き)て、能(く)廣く大乘の行者を利益シタマフ、唯(し)然なり、世尊・實に深³⁴⁷▼妙なりと為^ス。若(し)善男子善女人有(り)て、能く此(の)經の〔乃至〕一(の)四³⁴⁸▼句偈を持セン、是(の)如(き)〔之〕人・幾^{イッ}所ノ福をか得る」。尔(の)時(に)薄伽梵・文³⁴⁹▼殊師利菩薩(に)告(げ)て言(はく)。「若(し)善男子善女人有(り)て、恒河³⁵⁰▼沙(の)三千大千世界に於(て)・中に七寶を滿^ミテ、以^モ用^トテ〔て〕十方の³⁵¹▼諸佛に供養し、一一の佛の為に精舍^{ハ上}▼を造立して、七寶莊嚴して佛(と)〔及〕菩薩を安^ク置^キ供^ス養^スセンコト、恒沙劫を滿てむ。彼の諸の如來の所有の無量の³⁵³▼聲聞(の)弟子に亦^モ以^テ一切の所須を供養センコト、佛を供養するが如く等(しく)して差別³⁵⁴▼无カラン、是(の)如(き)諸佛・〔及〕聲聞衆等の般涅槃の後に³⁵⁵▼大寶塔を起^テ、舍利を供養セン。若(し)善男子善女人有(り)て)・此の心地經の一(の)四句偈を暫^ク聞^ク信^ズ³⁵⁶▼解し、菩提心を發し

て受持(し)讀習(し)³⁵⁷▼解説(し)書寫し・〔乃至〕極少・一人の為に説かむ。彼(の)種種(の)供³⁵⁸▼養の功德を以て、此の説經の所獲の功德に比^ヒテラするに、十六分の中に³⁵⁹▼其の一に及(ば)不^ス。〔乃至〕算數(も)譬喩も及(ぶ)こと能(は)不^ス所なり。况(んや)能く具足して受³⁶⁰▼持(し)讀習し・廣く人の為に説(か)むヲヤ。得(る)所の福利・限量す可(から)不^ス。若し³⁶¹▼女人有(り)て菩提心を發して此(の)心地³⁶²▼經を受持し讀習し書寫し解説(せ)む、是(の)如(き)女人をば最後身^{ハ上}▼と為^ス。更に復、受(け)不^ス。惡道³⁶³▼八難(の)〔之〕處に墮(ち)不^ス。〔於〕現身の中に十種の勝利の〔之〕福を感得セン。一(は)³⁶⁴▼〔者〕壽命を増益す。二(は)〔者〕衆の病惱を除く。三(は)〔者〕能く業障を滅す。³⁶⁵▼四(は)〔者〕福智皆増す。五(は)〔者〕資財に乏^トシカラ不^ス。六(は)〔者〕皮^ヒ膚^ヲハタヘ潤^ニウルヒ³⁶⁶▼澤^ニなり。七(は)〔者〕人の為に愛^シ敬セラル。八(は)〔者〕孝養の子を得^ル。九(は)〔者〕眷属³⁶⁷▼和睦^{ハ入}ムツヒ^ニす。十(は)〔者〕善心堅牢なり。文殊師利、在在處處

處・若(しくは) 368▽讀(み)若(しくは)諷(し)若(しくは)解説(し)若(しくは)書寫(せば)經卷所住の若(き)「之」處は、即(ち) 369▽是(れ)佛塔なり。一切の天龍人非人等・人中天上の・370▽上妙の珍寶を以て「而」供養す「之」應し。所以者何・此の經典の所 371▽在の若(き)「之」處は、即(ち)佛(と)「及」諸の菩薩・緣覺聲聞有るに為レバナリ。何(を)以(て)の 372▽故(に)、一切の如來・此の經を修行して、凡夫を捨(て)已(り)て阿耨多 373▽羅三藐三菩提を得、一切の賢聖・皆此の經(に)從(ひて)解脱を得ル「る」が 374▽故(なり)。文殊師利・我が涅槃の後・後五百歳(にして)・法滅セント欲(セ)ン時・ 375▽若し法師有(り)て此の心地經の衆 376▽經の中の王を受(持)讀(習)解(説)書(寫)セン「む」、是(の)如(き)法師は、我(と)與(異)なる(こと)無し。若(し)善男子善 377▽女人有(り)て、此(の)法師(を)供養尊重セン者、即(ち)十方三 378▽世の一切の諸佛を供養するに為(ル)。所(得)の福德・平等无二なり。是を眞法を・如來に 379▽供養すと名(づ)く。是(の)如(き)を名(づ)

け)て正行の供養と為(ス)。所以者何・是(の) 380▽大法師・无佛の時に在(り)て、濁惡世の邪見の有情の為に 381▽甚深の心地經王を演説して、惡見を離(レ)菩提道に趣(シ)使(メ)、廣(宣)流(布)して法を久(ク)住(セ)シ」令(シ)ムレバなり。是(の)如(き)を名(づ)けて无相好佛と為(ス)。一切の人天の供養す應(き) 383▽所(なり)。若(し)善男子善女人有(り)て、此(の) 384▽法師を合(掌)し「恭(敬)セバ」「は」「者」・我(無)上(の)大菩提の記を授(ク)。是(の)人は當(に)阿耨 385▽多羅三藐三菩提を得(當)シ・若(し)人・是(の)心地經を聞(く)こと)得(テ) 386▽四恩を報(ゼ)ンが為(ニ)菩提心を發(シ)て、若(し)は)自(ら)書(シ)、若(し)は)人(を)使(て)書(か)《使(め)》、若(し)は)讀(念)通 387▽利(セ)ン。是(の)如(き)人等・獲(む)所の福德・佛の智力を以(て)多少を籌(量)センに其(の)邊(を)得(388▽不(じ)。是(の)人(を)名(づ)けて諸佛の眞子と為(ス)。一切の諸天・梵 389▽王・帝釋・四大天王・訶(利)・底(母)・五百の眷屬・ 390▽拔(入)多(大)鬼神王・龍神八部・一切(の)聽(法)の諸(の)鬼神 391▽等・晝(夜)に離(レ)不(して)常(に)當(に)是(の)

如(き)佛子を擁護して、念³⁹²▽慧を増長し无礙
 (の)辯を與へ、衆生を教化して佛因を種^ウエ令む《當》
 し。文殊師利、³⁹³▽是(の)如(き)善男子善女人
 (は)・命終の時に臨(み)て、眼前に十³⁹⁴▽方
 諸佛を見タテマツルコト得、三業(は)乱レ不。初
 (め)には十種の身業清淨を獲む。云何ナルヲカ十
 (と) ³⁹⁵▼為ル。一(は)〔者〕身に苦を受(け)
 不。二(は)〔者〕目睛^{アラハ}露ナラ不。三(は)〔者〕
 手掉^{テウ} ³⁹⁶▼動^{ウゴキ} ³⁹⁷▼不。四(は)〔者〕
 足伸^{シム} ³⁹⁸▼縮^{シユク} (すること)无(から)む。
 五(は)〔者〕便^{ニヤク}溺^{ハス}遺^チ (せ)不。六(は)〔者〕
 汗流^{アセナガ}レ不。七(は)〔者〕外に捫^{モン}
 模^モ (せ)不、八(は)〔者〕手拳^{テノコ}舒^ノ展^ビ
 タラン、九³⁹⁸▽ (は)〔者〕顔容^{アヲタ}改^マラ不、十(は)
 〔者〕轉^{クマ}側^ヘ自^ミ如^ナナラン。經力に由(る)が故
³⁹⁹▽是(の)如(き)相有^アラン。次に十種の語業
 清淨を獲む。云何(なるを)か)十(と)為^スる。一(は)〔者〕
⁴⁰⁰▼微妙^{ミウミョウ}聲^ネを出(さ)む。二(は)〔者〕柔
 軟語を出(さ)む。三(は)〔者〕吉祥語を出(さ)む
 。四(は)〔者〕樂聞語を⁴⁰¹▽出(さ)む。五(は)

〔者〕隨順語を出(さ)む。六(は)〔者〕利益語を
 出(さ)む。七⁴⁰²▽ (は)〔者〕威徳語を出(さ)む
 。八(は)〔者〕眷屬^{ソム}に背力^{セリキ}不、九(は)〔者〕人天
 敬愛^{ケイアイ}セン、⁴⁰³▽十(は)〔者〕佛の所説^ホを讀^クメン、
 是(の)如(き)善語・皆此(の)經に由ラン。次
 (に)十⁴⁰⁴▽種(の)意業清淨を獲む、云何(なる
 を)か)十(と)為(る)。一(は)〔者〕瞋恚^{チンクイ}を生
 (せ)不。二(は)〔者〕結恨^{ケツコン}を懷^イ力^{リキ}⁴⁰⁵▼不。三
 (は)〔者〕慳^{ケン}心^{シン}を生^ゼ不。四(は)〔者〕※心
 を生(せ)不。五⁴⁰⁶▽ (は)〔者〕過惡^{カウ}を説^ト力^{リキ}不、
 六(は)〔者〕怨心^{オンシン}を生(せ)不、七(は)〔者〕顛
 倒^{テンタウ}心^{シン}无^ナカラン⁴⁰⁷▽八(は)〔者〕衆^{シュウ}物^{モノ}貪^{コン}(ら)
 不。九(は)〔者〕七慢^{シツマン}を遠離^トせん。十(は)〔者〕
 一切の佛法を⁴⁰⁸▽證^シ得^{トク}し、三昧^{サンマイ}を圓滿^{マンマン}セント樂^{ラク}欲^{キョク}セ
 ン。文殊師利、是(の)如(き)功徳(は)・⁴⁰⁹▽
 皆^{ミナ}深妙^{シンミョウ}の經典^{キョウテン}を受^ウ持^ヂ讀^ク習^{シユ}通^{ツウ}利^リ解^ケ説^{セツ}書
 寫^{シヤ}する難^{ナン}⁴¹⁰▼思議^{シギ}の力^{リキ}に由^ヨレリ。此の心地^{チノココロ}經^{キョウ}は
 无量^{ムリヤウ}處^{トコロ}に於^オても、无量^{ムリヤウ}時^{トキ}に於^オても聞^クこと⁴¹¹▽
 得^{トク}可^カ(から)不。何(に)况^{ケツ}(ん)や見^ミること得^{トク}、具
 足^{クゾク}して修習^{シュシユ}センヲヤ。汝^ニ等^ト大會^{ダイエ}・一心^{イツシン}に奉^{ホウ}⁴¹²▽持^ヂし

て速に凡夫を捨テ、當に佛道(を)成(す)《當》
 し。尔(の)時(に)文殊師利法王⁴¹³▽子等の无
 量(の)大菩薩・智光菩薩等の新發意の菩薩、⁴¹⁴▽
 阿若※陳如等の諸(の)大聲聞・天龍八部・人非人⁴
¹⁵▼衆・各―各に―心に・佛説を受持して、皆大に
 歡喜し信受(し)奉行シキ、

⁴¹⁷▽大乘本生心地觀經卷第八

△紙を継いで▽

平安左寺所藏古經卷有野道風筆跡
 此其類經也出其公手者乎宜宝貴也
 明治庚辰 畑成文拝識

印

△補注▽

3 掌―ヲコト点「し」「て」を擦消。

11 智―大正藏「地」(以下、校異にないものだけ)

22 ※―〔門+亥〕大漢和辞典(十一・41289)。大正

藏「礙」。

26 門―ヲコト点「こと」を擦消して「と」にする。

27 門―ヲコト点「こと」を擦消して「と」にする。

28 路―ヲコト点「こと」を擦消して「と」にする。

29 自―右側に消した跡あり。

宮―ヲコト点「こと」を擦消して「と」にする。

30 藏―ヲコト点「こと」を擦消して「と」にする。

32 引―右側に消した跡あり。

50 心―ヲコト点「なり」を擦消。

59 心―ヲコト点「は」を擦消。

69 久―「ヒサク」の訓、そのまま。

73 起―ヲコト点「す」を擦消。

74 ※―〔分+土〕大漢和辞典(三・4926)

76 ※―〔口+敢〕大漢和辞典(二・4299)

81 密―大正藏「蜜」。

味―ヲコト点「に」を擦消して、「を」にする。

84 心―大正藏「常」。

85 本―大正藏ナシ。

90 離―右訓擦消し、その上に「セハ」。ヲコト点

「て」擦消。

96 我(二字)―文字中央に、左から右へ斜めの線。

小林博士の点図では「音」点。

98 本ー文字中央に、右から左へ斜めの線。小林博士の点図では「訓」点。

100 異ー文字中央に、左から右へ斜めの線。小林博士の点図では「音」点。

102 偈ーヲコト点「に」を擦消。

109 蒙ーヲコト点「て」を擦消。大正蔵「聞」。

112 悟ーヲコト点「る」を擦消。

114 雨ーヲコト点「る」を擦消。

滿ーヲコト点「る」を擦消。

116 敵ーヲコト点「に」を擦消。左訓読めず。

125 受ー大正蔵「愛」。

128 尋ー大正蔵「礙」。

134 ※ー〔口＋奄〕大漢和辞典(三・3770)

140 念ー大正蔵「習」。

153 脱ー大正蔵「説」。

159 无ー原文「无復遺餘」の「復」の右側に「无」から続く訓としての「カラン」を擦消。

172 其ー大正蔵ナシ。

182 胸臆ー二合訓「ムネ」の「む」の字体は「ん」。

186 ※ー〔撤ー手＋水〕大漢和辞典(七・18319)

190 ※ー〔口＋奄〕大漢和辞典(三・3770)

197 獲ーヲコト点「く」あり。

201 ※ー〔獸偏＋弥〕大漢和辞典(七・20788)

206 塵ー大正蔵「蜜」。

207 與ーヲコト点「と」を擦消。

209 ※ー〔白＋ヒ〕大漢和辞典(八・22685)

213 為ー朱訓「スル」の「ル」は擦消か。

215 磧ー右朱筆「シヤ」は上字「砂」の音で、角筆

「シヤ」を避けて記したものか。

227 不ー「く」のヲコト点らしき点あり。

231 股ー大正蔵「鈷」。

234 ※ー〔口＋奄〕大漢和辞典(三・3770)

吽ー墨筆で「ウン」とあり。

235 是大神呪ー大正蔵「此陀羅尼」。

240 名小指ー大正蔵「第四指」、東大本「无名指小指」

247 授ー文字中央に、右上から左下へ向け斜めの線。

小林博士の点図では「訓」点。

248 結ーヲコト点「て」を擦消。

- 266 説―右訓「タマフ」を擦消。
- 277 護―文字中央に、右上から左下へ向け斜めの線。
小林博士の点図では「訓」点。
- 279 捨―文字中央に、右上から左下へ向け斜めの線。
小林博士の点図では「訓」点。
- 290 難―「雖」の左側に朱筆「ト」でミセケチにし、
右側に「難」字を記す。
- 299 蔵―朱筆訓「カクス」の「ス」を擦消。
- 319 遍―右下角に圈点あり。不詳。
- 323 位―文字中央に、右上から左下へ向け斜めの線。
小林博士の点図では「訓」点。
- 328 ※―〔广+臬〕大漢和辞典(四・9398)。
- 337 思―右訓、虫損のため読めず。
- 356 習―大正蔵「念」。
- 366 澤―左訓、読めず。
- 378 為―文字中央に、右上から左下へ向け斜めの線。
小林博士の点図では「訓」点。
- 382 *―「住」字に「セシ」と付訓し、「令」字に
「セシムレバ」と付訓してある。
- 389 ※―〔人+尔〕大漢和辞典(一・472)
- 397 模―〔僅+人+手〕のような字をミセケチ。
- 400 聲―大正蔵「語」。
- 405 ※―〔土+石〕の字を記す。大正蔵「妬」。
- 411 習―ヲコト点「し」を擦消。
- 414 ※―〔立心偏+喬〕大漢和辞典(四・11201)
- 415 説―大正蔵「語」。